

2010/05/22 (土) 13:00-17:30

インド文学史科 第3回研究会 (東京外国語大学 本郷サテライト)

研究報告

修士論文『デーヴキーナンダンの再評価—20世紀初頭のヒンディー大衆文学作家に関する考察—』

東京外国語大学 大学院総合国際学研究科 博士後期課程

安永有希 (yux_xuy@hotmail.com)

1. はじめに

(1) デーヴキーナンダン・カトリー (Devakīnandana Khatrī, 1861.7.18-1913.8.1)

- ・生涯：複数の記述が見られるため、事実は明確ではない。

(概要) 1861年7月18日、商人 Īśvaradāsa と地主の娘 Govindhī との間に生まれる。

母親の実家があるビハール州ムザッファルプルで幼少期を過ごし、その後はカーシーへ。

職業…商店経営⇒森の請負 (土地所有者の中間介在者) ⇒作家。

1898年、Laharī Buka Dīpo (Laharī Press) を設立。

1913年に他界。

(2) 作品紹介

- ・ティラスミー・アイヤーリー (Tilasmī Aiyārī) 小説¹：
『チャンドラカーンター (Candrakāntā)』 (1890頃)、
『チャンドラカーンター・サンタティ (Candrakāntā Santatī)』 (1894-1905)、
『ブートナート (Bhūtanātha)』 (1907-12)
- ・探偵小説：Virendravīra (1895)、(Naulakhā Hārā², 1899)、Kājara kī Koṭharī (1902)
- ・ロマンス：Narendra Mohinī (1893)、Kusuma Kumārī (1899)、(Anūṭhī Begamā³, 1905)
- ・歴史小説：Gupta Godanā (1906)

¹ 「迷宮 (tilasma)」と「幻術使い (aiyāra)」が描かれた物語。王子が味方の幻術使いと共に敵国の幻術使いらとの攻防を展開しながら、国をまたいで横たわる迷宮に仕掛けられた絡繰りをひとつひとつ解き、敵に捕らわれて迷宮に幽閉された王女を救出する。

² 詳細な物語の内容に関しては不明であるが、複数の文献で探偵小説として紹介されている。

³ 詳細な物語の内容に関しては不明。ロマンスとして紹介されている。

・ 翻訳 : *Śaitāna* (1907)

・ (*Saudāgarā*⁴)

→ 雑誌 *Upanyāsa Laharī* で作品を発表。

(3) 出版目録

a. South Asia Microform Project (SAMP) による *Catalogue of Books*⁵ (東京外大図書館所蔵 ; microfiche)。

United Provinces ・ Punjab ・ Ajmer & Merwara ・ Central Provinces ・ Bihar & Orissa ・ Calcutta ・ Bombay

b. デーヴキーナンダン作品の出版状況

→ *Statement of Particulars Regarding Books and Periodicals Published in the United Provinces.* (1904-45)

出版部数) 『チャンドラカーンター』 : 約 7 万部

『チャンドラカーンター・サンタティ』 : 約 54 万部

『ブートナート』 : 約 7 万部

c. J. F. Blumhardt (British Museum の司書) による出版目録

→ British Museum が実際に購入した書誌に基づくため、広範囲にわたるものの網羅的ではない。

2. 先行研究の検討

(1) デーヴキーナンダン作品を軽視する傾向

a. 功利主義的文学観 [高橋 1990]

b. 雑誌に掲載された酷評 例) *Sarasvatī* 1909 年 10 月号「言語の悪用」「人間社会に対する悪意」

c. Rāmacandra Śukla による批評

民衆の人気を得た最初の小説家は、カーシーに住むデーヴキーナンダン・カトリーである。彼の小説は単に娯楽を目的としており、そこにラサの広がりや豊かな感情・性格の描写はない。事件が中心であり、人生の特異な面を表現する努力が見られない。このため、彼の作品は文学の範疇には入らない。しかし、多くの読者を生み出したことは評価できる[Śukla1972: 340-1]。

d. 他の評論家らの Rāmacandra Śukla への追随。

(2) 先行研究

a. デーヴキーナンダン研究 : Madhureśa (1980)、L. R. Śarmā (1993)、Pradīpa Saksenā (2004)

b. 娯楽を目的とする小説分野の研究 : Kṛṣṇa Majṭhiyā (1978)、Vimareśa Ānanda (1990)

⁴ 内容・出版年ともに不明。

⁵ 印刷所及び図書登録法 (Press and Registration of Books Act, 1867) より、インド政府は出版社に対して出版物に関する詳細な情報と、印刷された作品全てを提出するよう求めた。この法律のもとで提出された情報は編集され、四半期毎に英国インドの各州で出版された。これは 1890 年から独立まで継続されている。この出版情報記録が SAMP によって複写された。

(3) デーヴキーナンダンに対する評価

- a. 膨大な読者の獲得：多くの文献で言及されている。
- b. TA 小説の創始：高い娯楽性のために文学から切り離され、評価も与えられていない。
→いずれも言及に留まり、具体的な考察はなされていない。

3. 小説の歴史におけるデーヴキーナンダン

(1) 説話と翻訳 (1800-1869)

- a. ヒンディー散文初のオリジナル作品：
→Imśā Allā Khāna による『王妃ケートキー物語 (Rānī Ketakī kī Kahānī)』(1800 頃)
- c. 他文学作品からの翻訳・翻案が主流を占める (サンスクリット・ペルシャ・ウルドゥー文学)。
→道徳的・宗教的・娯楽的内容。

(2) 説話から小説へ (1870-1889)

- a. ベンガル小説の翻訳・翻案が盛んに。
→ベンガル小説を手本にヒンディー小説が執筆され始める (1880 年初頭)。
- b. 最初のヒンディー小説：Śrīnivāsa Dāsa による『パルクシャー・グル (Parikshā Guru)』(1882)
- c. バーラテンドゥ時代：社会改革・社会改善が唱えられる。
→小説も社会的目的 (女性教育・社会改善など) をもって執筆される傾向に。

(3) デーヴキーナンダンの登場から写実主義へ (1890-1918)

- a. ヒンディー小説の展開期 (TA 小説・探偵小説・歴史ロマンスなど)。
→『チャンドラカーンター』から幕を開ける。
その他、Kīśorīlāla Gosvāmī、Gopālarāma Gahamaṛī らの作品。
- b. 1918 年の Premacanda 登場により、ヒンディー小説に写実主義が取り入れられる。
→TA 小説は徐々に衰退していく。

4. デーヴキーナンダンの描く世界

(1) 物語と読者 (一般読者に広く読まれていた物語)

- a. ヒンディー説話『王妃ケートキー物語』：1830・40 年以降に普及。
- b. サンスクリット説話：1840 年以降に普及。『獅子座三十二話』(約 9 万部、1908-45)。
- c. ダースターン (キッサ)：19 世紀後半から 20 世紀。
特に Qissa Tota Maina (約 25 万部、1904-45)、Saringa Sarebrj (約 32 万部、20 世紀以降)。

(2) 物語の伝統にみる『チャンドラカーンター』(モチーフの観点から)

- a. スーフィーの恋愛詩(ヒンディー説話): 出会い・別離・結婚
- b. サンスクリット説話: 有能な大臣
- c. ダースターン: tilasma=魔術
→ティラスミー・アイヤーリー小説では tilasma=迷宮。

(3) 『チャンドラカーンター』の新しさ

- a. 複雑な物語構成: プロットの利用。(ストーリーからプロットへ)
- b. 非現実性の排除: 非現実的な出来事に合理的な説明をつけ、実現可能であるとする。

5. デーヴキーナンダンの言語観

(1) 散文確立への流れ(カリーボーリー散文の発達)

- a. インドの伝統的な流れ: 古くは8世紀の文学作品中に。
- b. イギリスの影響: Fort William College (Lallūlāla など)。

(2) ヒンディー散文の三つの形

- a. Rājā Śivaprasāsa: ペルシャ・アラビア語彙を多用。一般大衆に普及していない語彙も。
- b. Rājā Lakshmaṇa Siṃha: サンスクリット語彙を多用。普及しているペルシャ・アラビア語彙をも排除。
- c. Bhāratendu Hariścandra: サンスクリット語彙が基調。普及しているペルシャ・アラビア語彙は用いる。

(3) デーヴキーナンダンの言語

- a. デーヴキーナンダンの理想とする言語: サンスクリット語彙を基調とする。

しかし、執筆に用いる言語に関しては一般大衆の理解できる言語で執筆すべきという考えも。

⇒『チャンドラカーンター』から『チャンドラカーンター・サンタティ』にかけて徐々に言語を変化させ、大衆の言語を自身の理想とする言語へ近づける。

体にもし魂がなければその体は役に立たず、もし魂が適切な体を得られずに鳥獣の体を得たとしたら、その魂も無駄である。このため、体を作ってそれからその中に魂を確立することこそが正当かつ有益である。もっとも、『チャンドラカーンター』及び『サンタティ』の中で、いつ、そしてどこで言語が変化したのかは判明しないが、その始めと終わりの言語は、ちょうど子どもと老人の差のような変化が見られるだろう。一気に多くの単語を広めたとしたら、それほどほどのサンスクリットの単語を…無学な農村の人々に覚えさせるのは全く不可能である
[Devakīnandana 1968: 84]。

- b. 『チャンドラカーンター』と『チャンドラカーンター・サンタティ』の言語を比較

- ・序文：ペルシャ・アラビア語彙 55.7%、サンスクリット語彙 44.3%
- ・第1章：ペルシャ・アラビア語彙 63.4%、サンスクリット語彙 36.6%
- ・第24章：ペルシャ・アラビア語彙 52%、サンスクリット語彙 48%
- ・あとがき：ペルシャ・アラビア語彙 5.2%、サンスクリット語彙 94.8%

6. おわりに

a. 結論

b. 今後の課題

- ・出版当時の批評（雑紙）の原文にあたり、その主張の正当性を分析。
- ・デーヴキーナンダン以降の大衆小説に見られるデーヴキーナンダンの影響を考察（物語面・言語面）。
- ・読者とは？ 当時の文献から読み取る。

〈資料1〉修士論文目次

序章	第三章 デーヴキーナンダンの言語観
第一節 問題の所在	第一節 散文体確立の流れ
第二節 先行研究の検討と本研究の視点	第二節 ヒンディー散文の三つの姿
第三節 本論文の構成	第三節 デーヴキーナンダンの言語
第一章 小説の歴史におけるデーヴキーナンダン	終章 デーヴキーナンダンの再評価
第一節 説話と翻訳（1800-1869）	第一節 本研究の結論
第二節 説話から小説へ（1870-1889）	第二節 本研究の意義と展望
第三節 デーヴキーナンダンの登場から写実主義へ（1890-1918）	付録
第二章 デーヴキーナンダンの描く世界	付録1：デーヴキーナンダン TA 小説三部作概要
第一節 物語と読者	付録2：第二章語源分析結果
第二節 物語の伝統にみる『チャンドラカーンター』	付録3：デーヴキーナンダン作品出版状況
第三節 『チャンドラカーンター』の新しさ	

〈資料2〉

『チャンドラカーンター』出版状況（1904-1945）

出版年	出版日	タイトル：章	版：部数	価格 As.
1904	5/15	Candrakāntā : 1	6th : 1000	8
	12/6	Candrakāntā : 4	6th : 1000	8
	12/8	Candrakāntā : 3	6th : 1000	8
	12/11	Candrakāntā : 2	6th : 1000	8
1906	8/3	P:Candrakāntā (ill)	7th : 2000	1?4?
1908	12/10	P:Candrakāntā : 2	7th : 2000	4
	12/31	P:Candrakāntā : 3	7th : 2000	4
1909	3/25	P:Candrakāntā : 4	8th : 2000	4
1910	2/1	Candrakāntā : 1	8th : 1000	8
1913	7/16	Candrakāntā : 2 (ill)	new : 1000	8
	12/20	Candrakāntā : 1-4 (ill)	new : 2000	Rs. 1
1915	5/30	Candrakāntā : 1-4 (ill)	new : 5000	Rs. 1
	6/25	Candrakāntā : 3 (ill)	new : 1000	8
	6/26	Candrakāntā : 4 (ill)	new : 1000	8
1918	10/8	Candrakāntā : 1 (ill)	new : 1000	8
1921	11/29	Candrakāntā : 2 (ill)	? : 500	10
1922	10/3	P:Candrakāntā : 1-4 (ill)	new : 5000	Rs. 1, As. 4
1924	10/31	P:Candrakāntā : 1-4 (ill)	new : 5000	Rs. 1, As. 8
1928	12/23	Candrakāntā : 1-4 (ill)	new : 7000	Rs. 1, As. 8
1932	7/23	Candrakāntā : 1-4 (ill)	new : 8000	Rs. 1, As. 8
1935	7/14	Candrakāntā (ill)	new : 8000	Rs. 1, As. 8
1941	12/1	Candrakāntā : 1	21th : 2000	6
	12/3	Candrakāntā : 2	21th : 2000	6
	12/5	Candrakāntā : 3	21th : 2000	6
	12/9	Candrakāntā : 4	21th : 2000	6
1944	8/10	Candrakāntā : 1	22th : 1000	12
	8/11	Candrakāntā : 2	22th : 1000	12
	8/12	Candrakāntā : 3	22th : 1000	12
	8/12	Candrakāntā : 4	22th : 1000	12

資料出所) South Asia Microform Project, *Statement of Particulars Regarding Books and Periodicals Published in the United Provinces.*

注記) ・価格単位はアンナ (ānā、16 分の 1 ルピー)。1 ルピーを上回る場合はその旨を明記した。

・文献において読み取りが出来ない場合は? と記した。

・P は Pocket edition の略。

・ill は illustration の略。

〈資料3〉 主要参考文献

□印文

Devakīnandana Khatrī, 1908, *Candrakāntā* [Kāśī: Laharī Preśa].

——1915, *Būtanātha* [Benares: Lahari Press].

——1960, *Candrakāntā Santati, in 6 vols* [Vārāṅasī: Laharī Buka Dīpo].

Dhīrendra Varmā, 1969, *Hindī Sāhitya, in 3 vols* [Prayāga: Bhāratīya Hindī Parishad].

——1963, *Hindī Sāhitya Kośa, in 2 vols* [Vārāṅasī: Jñānamaṇḍala].

Gopāl Rāy, 1965, *Hindī Kathā Sāhitya aura Usake Vikāsa para Pāthakoṃ kā Prabhāva* [Paṭṇā: Grantha Niketana].

——1968, *Hindī Upanyāsa Kośa, in 2 vols* [Paṭṇā: Grantha Niketana].

——1977, “Upanyāsa” *Hindī Sāhitya kā Bṛhat Itihāsa, 9 bhāga: Hindī Sāhitya kā Parishkara, Dvivedī kāla* [Kāśī: Nāgarī Pracāriṇī Sabhā] pp. 107-131.

Lakshmīsāgara Vārshṇeya, 1960, *Bhāratendu Hariścandra kṛta Śrī Candrāvālī : Nātikā* [Gorakhpura: Viśvavidyālaya Prakāśana].

——1966, *Ādhunika Hindī Sāhitya kī Bhūmikā : 1757-1857 ī.* [Ilāhābāda: Lokabhāratī Prakāśana].

——1954, *Ādhunika Hindī Sāhitya : 1850-1900 ī.* [Ilāhābāda: Ilāhābāda Yūnīvarsitī].

——1972, “Upanyāsa” *Hindī Sāhitya kā Bṛhat Itihāsa, 8 bhāga bhāga : Hindī Sāhitya kā Abhyutthāna, Bhāratendu kāla* [Kāśī: Nāgarī Pracāriṇī Sabhā] pp. 232-49.

Madhureśa, 1989, *Devakīnandana Khatrī* [Naī Dillī: Sāhitya Akādemī].

Majṭhiyā, Kṛshṇa, 1978, *Hindī ke Tilasmī va Jāsūsī Upanyāsa* [Jayapura: Pañcaśīla Prakāśana].

Nagendra, 1980, *Hindī Sāhitya kā Itihāsa* [Naī Dillī: Neśanala pabliśinga hāusa].

Pradīpa Saksenā, 2004, *Tilasmī Sāhitya kā Sāmrajyavāda-Virodhī Caritra* [Dillī: Śīlpāyana].

Śukla, Rāmacandra, 1972, *Hindī Sāhitya kā Itihāsa* [Kāśī: Nāgarīpracāriṇī Sabhā].

Śarmā, L.R., 1993, *Upanyāsakāra Devakīnandana Khatrī* [Naī Dillī: Neśanala pabliśinga hāusa].

Tivārī, Rāmacandra, 1955, *Hindī kā Gadya-Sāhitya* [Gorakhpura: Viśvavidyālaya Prakāśana].

——1969, “Upanyāsa : Premacanda Pūrva” *Hindī Sāhitya : san 1850 ī. ke bāda* [Prayaga: Bharatiya Hindi Parishad].

——1972, “Premacanda-pūrva Hindī Upanyāsa” *Hindī Upanyāsa* [Dillī: Rādhākṛshṇa Prakāśana] pp. 128-148.

——1980, “Bharatendu-yuga : Gadya-Sāhitya” *Hindī Sāhitya kā Itihāsa* [Naī Dillī: Neśanala pabliśinga hāusa] pp. 478-92.

Vimaleśa Ānanda, 1990, *Hindī ke Kutūhalapradhāna Upanyāsa* [Naī Dillī: Anurāga Prakāśana].

□英文

- Blumhardt, J.F., comps., 1893, *Catalogue of Hindi, Panjabi, Sindhi, and Pushti Printed Books in the Library of British Museum* [London: B. Quaritch and others].
- 1899, *Catalogue of the Hindi, Panjabi and Hindustani Manuscripts in the Library of British Museum* [London: the British Museum].
- 1900, *Hindustani books (Catalogue of the Library of the India Office, vol. II, part II)* [London: India Office].
- 1902, *Hindi, Panjabi, Pushtu, and Sindhi books (Catalogue of the Library of the India Office, vol. II, part III)* [London: India Office].
- 1909, *A Supplementary Catalogue of Hindustani Books in the Library of the British Museum acquired during the year 1889-1908* [London: the British Museum].
- 1913, *A Supplementary Catalogue of Hindi Books in the Library of the British Museum acquired during the year 1893-1912* [London: the British Museum].
- 1926, *Catalogue of the Hindustani Manuscripts in the Library of the India Office* [London: Oxford University Press].
- Gaeffke, Peter, 1978, *Hindi Literature in the Twentieth Century (A History of Indian Literature, vol. VIII, fasc.5)* [Wiesbaden: Harrassowitz].
- Joshi, Priya, 2002, *In Another Country : Colonialism, Culture, and the English Novel in India* [New York : Columbia University Press].
- McGregor, Ronald Stuart, 1974, *Hindi Literature of the Nineteenth and Early Twentieth Centuries (A History of Indian Literature, vol. VIII, fasc. 2)* [Wiesbaden: Harrassowitz].
- 1984, *Hindi Literature from its Beginnings to the Nineteenth Century (A History of Indian Literature, vol. VIII, Modern Indo-Aryan Literatures, pt. 1, fasc. 2)* [Wiesbaden: Harrassowitz].
- Orsini, Francesca, 2004, “Pandits and Others : Publishing in Nineteenth-Century Benares” *Print areas : book history in India* [Delhi: Permanent black] pp. 103-38.
- Stark, Ulrike, 2007, *An Empire of Books : the Naval Kishore Press and Diffusion of the Printed Word in Colonial India* [New Delhi: Permanent Black].
- (マイクロフィッシュ) South Asia Microform Project, *Statement of Particulars Regarding Books and Periodicals Published in the United Provinces.*
- (ウェブサイト) http://www.columbia.edu/itc/mealac/pritchett/00litlinks/marv_qissa/index.html
(Pritchett, Frances W., 1985, *Marvelous Encounters : Folk Romance in Urdu and Hindi*)

□邦文

尾崎秀樹 1989年、『大衆文学の歴史』講談社。

——2001年、『大衆文学論』講談社。

——2007年、『大衆文学』紀伊國屋書店。

尾崎秀樹・多田道太郎 1971年、『大衆文学の可能性』河出書房新社。

木村毅 1933年、『大衆文学十六講』中央公論社。

高橋明 1990年、「バーラテンドゥ・ハリシュチャンドラの文学観：ヒンディー文学における功利主義的文学観とその限界」『論集第3号』（大阪外国語大学）149-74頁。

——1993年、「ブレイムチャンドとリアリズム」『印度学仏教学研究』第41巻第2号（日本印度学仏教学会）74-9頁。

田中敏雄 1975年、「ハザーリープラサード・ドヴィヴェーデーの歴史ロマン」 *Area and Culture Studies* 25（東京外国語大学）39-62頁。

——1995年、「ハリシャンカル・パルサーイーの『王妃ナーグパニー物語』」『印度学仏教学研究』第44巻第1号（日本印度学仏教学会）28-34頁。

ハザーリープラサード・ドヴィヴェーデー著（坂田貞二・宮本啓一・橋本泰元訳） 1992年、『インド・大地の讃歌—中世民衆文化とヒンディー文学』春秋社。

日沼倫太郎 1967年、『純文学と大衆文学の間』弘文堂新社。

ビパン・チャンドラ著（粟屋利江訳） 2001年、『近代インドの歴史』山川出版社。

フォスター、E.M. 著（中野康司訳） 1994年、『小説の諸相』みすず書房。